平成25年度 東京岐阜県人会

夏のイベント

県人会 第六回「特別講演会・懇親会」開催される

「江戸城天守を再建し、観光立国のシンボルタワーに！」

去る平成26年7月12日、午後2時から豊島区駒込にある女子栄養大学駒込キャンパス小講堂において、太田道灌の18代目子孫・太田資暁氏をお招きし、「江戸城天守閣再建」と題した講演会が開催されました。歴史好きにはたまらないテーマで、気温35度という猛暑にもかかわらず多数の会員が参加し、講演に引き続き開かれた懇親会もなごやかに行われました。

夏の恒例イベントとなった講演会。今年は、山本康夫幹事長の会社の先輩にあたる太田資暁氏を講師に迎えた。太田氏は、（株）東京海上火災保険の専務取締役、（株）東京海上日動あんしん生命保険の社長などを歴任され、現在は「認定ＮＰＯ法人江戸城天守を再建する会」の会長である。ちなみに、太田道灌の諱が資長であったことから、太田家では代々、「資」という字をつけてきたそうだ。以下は講演の要旨。

太田道灌の18代目子孫・太田資暁氏

江戸城築城にいたる背景

太田道灌は徳川家康より１５０年ほど前の人だ。永享４（１４３２）年、鎌倉公方を補佐する関東管領・上杉氏の一族である扇谷上杉家の家宰をつとめた太田資清の子として生まれ、幼少より鎌倉五山の一つである建長寺に預けられ英才教育を受ける。人生で三十数度の戦いにおいて一度も負けたことが無いというからすごい。

15世紀の関東は乱れに乱れていた。鎌倉公方には現在の神奈川・東京・埼玉・群馬の諸将が付き、古河公方には茨城・埼玉・栃木・千葉の諸将が付く。関東には2つの政権が並立していたわけだ。そもそも足利尊氏により関東公方という独立政権が作られたのが混乱のもとなのだが、１４５０年代の関東では、京都は関東管領（上杉氏）を使い、その関東公方（足利氏）の暴走を抑えようとした。

関東管領・上杉氏は山内家・犬懸家・宅間家・扇谷の四家（いずれも鎌倉の地名）に分かれていたが、上杉禅秀の乱以降、山内上杉家が関東管領職を独占。その山内家を支えるのが、太田氏の主君である相模の守護・扇谷上杉家

であった。太田道灌は1456年に家督を譲られて以後28年間もの間、享徳の乱を戦い抜くのだ。

家督相続問題でもめ続ける上杉氏。幕府から攻められた足利成氏が下総古河城に拠り古河公方と称すると、上杉氏に反感を抱く関東の諸将の支持を集め、結果、関東地方は利根川を境界線として、東は古河公方陣営、西は京都の意を受けた関東管領陣営に分断される。

太田道真・道灌父子は古河公方と闘うための防衛拠点として、扇谷上杉家当主の命で1456年～57年、武蔵国入間郡に川越城、埼玉郡に岩槻城を築いたといわれている。さらに、古河公方側の有力武将・千葉氏を抑えるために、両勢力の境である利根川下流域に城を築く必要があったので、江戸氏の領地であった武蔵国豊島郡に江戸城を築いた。

江戸城が完成してから、品川より居を移したのは、長禄元年4月8日（1457年5月1日）といわれる。江戸城が築かれると、その守護として日枝神社や平河天満宮などを城の周辺に配したのである。

現在も皇居には彼の名を冠した道灌堀が残っているのは有名だ。筆者も今年、天皇陛下傘寿記念の皇居乾通りの通り抜けの際、道灌堀を垣間見た。

万里集九との交流と道灌の最期

道灌は詩歌の道にも秀で、山吹の歌などは誰もが知る逸話だが、飛鳥井雅親や万里集九など当代一流の歌人・漢詩人との交流も有名だ。万里集九（1428～1507？）は京の相国寺の高僧。万里は道号、集九は諱だ。室町時代の禅僧で、当代一、二を争う漢詩人として知られたが、地方で還俗し、応仁の乱を避けて文明3（1471）年には美濃国の鵜沼に住んだ。長男・次男は美濃で生まれているので、岐阜県とはご縁があるわけだ。その後、尾張や三河に移り、文明17（1485）年には太田道灌に招かれて江戸城に滞在した。その際、所蔵の名画や六千冊にものぼる蔵書に驚いたといわれている。彼は城内に住居を建て、「梅花無尽蔵」と名付けた。現在の皇居の梅林坂のあたりである。

ところが翌文明18年7月26日（1486年8月25日）、道灌は上杉定正の糟屋館（神奈川県伊勢原市）に招かれ、風呂場で曽我兵庫に暗殺される。享年55歳。その背後にはもちろん関東管領・上杉定正がいた。そもそも道灌は享徳の乱で三十数度の合戦を戦って連戦連勝、ほぼ独力で上杉家の危機を救った。おかげで主家の扇谷上杉家の勢力は大きく伸長したわけなのだが、（「太田道灌状」で彼は「山内家が武・上の領国を支配できるのは、私の功である」と自身、述べている。）道灌が関東を抑えたのを定正から妬まれての謀殺であったのだ。（扇谷家中が江戸と川越の城の補修を怪しんで定正に讒言したという説もある。）道灌のいまわの際の言葉は「当方滅亡」で、それは「こんなことをやっていたら、今に上杉家は滅亡しますよ！」という意味。その後の歴史は彼の予言が正しかったことを証明している。

前述の万里集九はしばらくの間、定正に引き留められるが、親しい道灌を謀殺した定正の世話にはなりたくなかったのだろう、1488年、早や江戸を発ち、越後・飛騨を越えて美濃国鵜沼の旧宅に帰った。3年9か月の大旅行だった。そして後に有名な詩集「梅花無尽蔵」を編纂する。集九は後年、定正に追われた道灌の子、太田資康を見舞っている。その人柄が偲ばれるゆえんである。

江戸城寛永度天守の再建

さて、時代は下る。江戸城の天守閣は、慶長11（1611）年に徳川家康が、元和8（1622）年に二代・秀忠が、寛永15（1638）年に三代・家光がそれぞれ築いた。ところが、太田道灌が江戸城を築いてからちょうど二百年後の明暦3（1657）年の大火で天守閣は消失する。

「振袖火事」ともいわれる明暦の大火では、当時の江戸の人口50万人のうち10万人以上が犠牲になり、江戸の町の大半が焼き尽くされたが、江戸城もその例外ではなかった。この未曾有の災害に対処すべく陣頭指揮をとったのが3代将軍家光の異母弟で、4代将軍家綱の後見役・保科正之だが、彼は「今は天守閣再建の為に国の財産を費やす時節ではない」として、被災者の救済、民生の安定と、江戸市街の災害復興を最優先した。江戸城天守は江戸幕府の権威・権力の象徴であったのだが、その再建は先延ばしにされたのである。この英断が、その後200年にわたる江戸期の社会の平和と安定の礎となり、元禄から文化・文政期にかけて江戸文化が大輪の花を開くことになった。

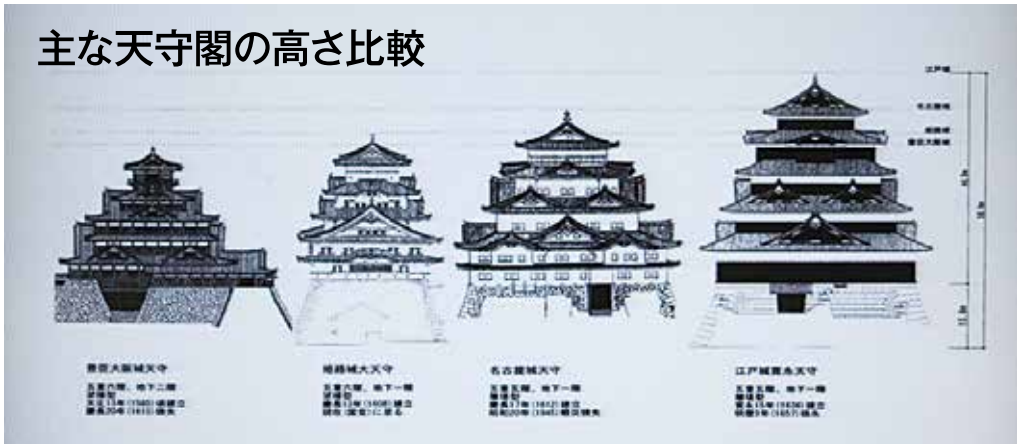
江戸城天守閣を観光立国日本の首都東京のシンボルに

爾来約360年。太田資暁さんは「江戸城天守の再建の時節は今まさに到来した！」と力説する。「なぜなら、観光立国実現は日本の国家的課題だからです。」

現在の日本の国際旅行収支の赤字幅はなんと世界第2位。海外からの旅行客収入は世界第30位前後で低迷している。少子高齢化社会の閉塞状況を打ち破り、経済成長を続けるアジアの観光需要を取り込むのが喫緊の課題だ。2006年、国は「観光立国推進基本法」を制定したが、観光立国実現が日本の発展に不可欠なのは誰にでもわかる。そのためには、日本の魅力的な文化・伝統・技術についての情報を積極的に海外に発信していくことが求められている。

江戸城寛永度天守は、姫路城の面積で2倍、体積で3倍の規模。日本で最も壮大な木造建築の最高傑作であったといわれている。のみならず、姫路城と同じ木組みの柔構造による耐震建築技術は、法隆寺の五重塔の心柱と並んで、地震国日本が誇る伝統の技として注目に値する。

「世界の大都市には、ロンドンのバッキンガム宮殿、パリ郊外のヴェルサイユ宮殿、北京の紫禁城、ニューヨークの自由の女神など、歴史と伝統と文化の象徴というべきモニュメントがありますが、東京にはそうした記念碑がありません。観光立国日本の首都東京に江戸城天守を再建することは、歴史と伝統を代表するとともに、クールジャパンで世界を魅了する新たな日本の文化と技術を発信するためのシンボルタワーを建設することにもなるのです。」と太田さんは熱弁をふるう。



「2002年ドイツ連邦議会は、第二次世界大戦で破壊されたベルリン王宮の再建を決議しました。首都の中心に歴史的建造物を記録に忠実に再現し、未来志向の文化施設とする考えに、ドイツ人のコンセンサスが得られたのです。」

と太田さん。同様なことはポーランドの首都ワルシャワの旧市街にもいえるわけで、瓦礫から昔のまま忠実に再現されたそれは、今やユネスコから世界遺産として認定されている。こうした歴史的建造物の再建と、それに新しい息吹を吹き込もうとする動きは、今や世界の潮流となっているようだ。

「まずは日本橋の真上を覆う首都高速道路を取払い地下に移して、東京駅・日本橋・江戸城という都心のトライアングルを築くのです。」

と太田さんの弁はますます熱くなってくる。江戸城天守を再建した場合の費用は350億円といわれるが、推定される経済波及効果は1043億円、雇用誘発効果は8240億円、初年度収入は70億円がみこまれている。ちなみにベルリン王宮の再建費用は700億円、スカイツリーの1年目の入場者数は638万人、東京タワーの1年目の入場者数は520万人だ。近年再建された熊本城が大いに話題となり、地域経済活性化に一役買っていることは私たちの記憶に新しい。今回スライドで、CGにより制作された〝江戸城のある都心の風景〟（右図参照）を拝見したが、現代都市東京に趣と気品を添える景色となっている。

「今こそ江戸城天守の再建を！」

本講演を拝聴した会員のなかには、その趣旨に賛同して早速会員になった方もだいぶおられるようだ。

（記・荒垣さやこ）

懇親会

講演終了後、同大学内のレストラン・松柏軒で講師を囲んで懇親会を開催しました。松柏軒は伊達正宗の下屋敷として築かれ、元禄年間に徳川光圀が訪れた際にこの名を付けたという由来があり、また大正時代には孫文がここに身を寄せ、同志たちと中国革命の謀議をしたという場所。その名を受け継ぐレストランで、歴史好きの会員たちが次々に講師への質問をし、また、おいしい料理に舌鼓をうちながら会員同士の交流を深めました。会員で同大の金田雅代教授によれば「参加者の年齢構成を考慮して作ったメニュー」という料理は、和のテーストもふんだんに盛り込んであり、たいへん好評でした。

平成26年度 総会・懇親会 開催のお知らせ

日時
平成26年11月18日(火)
※ギフネット春夏号で11月20日(木)とお知らせしておりましたが都合により変更となりましたのでご注意ください。

総会
午後6時から6時20分

懇親会
午後6時30分から8時30分

会場
ホテルグランドパレス
東京都千代田区飯田橋
1丁目1番地1号

参加費
会員・非会員を問わず
お一人様8千円、ただし学生3千円
(大学1年生は初回に限り無料)

＊当日受付も可能ですが、準備の都合上お早めにお申し込み下さい。詳細については、同封の案内チラシをご覧下さい。

前年度懇親会の様子